

# 『とはずがたり』女樂における『源氏物語』引用

—二条と明石の君をつなぐ「数ならぬ身」—

荒井 由実子

一、はじめに

『とはずがたり』では、『源氏物語』の記事を真似た宴が何度か催されるが、特に重なって語られるのが、巻二の小弓の負けわざの場面である。後深草院と龜山院が小弓を競ったことを発端としており、新院である龜山院の「御負あらば、御所の女房たちを、上下みな見せたまへ。我負けまゐらせたらば、またそのように」という条件の下に小弓の競いが始まるのである。

後深草院と龜山院の關係は非常に複雑であることがわかつている。後深草院は後嵯峨天皇の第二皇子で、四歳で帝の位についている。そして父・後嵯峨天皇の院政のもと、十七歳の時に、弟・龜山天皇に位を譲っている。この譲位は、後深草院の意向ではなく、父・後嵯峨天皇の意向によったものだろう。後深草院には東の御方が生んだ皇子・熙仁（後の伏見天皇）がいたが長い間立坊おろか、親王宣下すらされなかった。熙仁に遅れること二年、龜山天皇にも皇子・世仁（後の後宇多天皇）が誕生する（一二六七年）。この皇子は、文永五年（一二六八年）に立坊している。この状態をみればわかるように、後深草院側の子孫が皇位から遠ざか

るようになっていたのだ。

後嵯峨院の絶対的な院政の中、このような状況は変わらなかったが、後嵯峨院の崩御後、龜山天皇が後嵯峨院は、自分の（龜山）の血統に皇位を継がせる意向だったと主張し、そのような手はずを整えていく。後深草院は絶望し、『とはずがたり』巻一でも言及されているが、その身の出家をも考えるのである。

結局、幕府が調停に入ること、後深草院の血統（持明院統）の子孫と龜山天皇の血統（大覚寺統）の子孫が交互に皇位に就くこととなった。世に言う両統迭立である。この方式により、龜山天皇の退位後は、すでに立坊していた龜山天皇の皇子、世仁が皇位に就き後宇多天皇となった（一二七四年）。その翌年、後深草院の皇子、熙仁親王が立坊し、この両統の対立は一旦落ち着くこととなった。しかし、この体制こそがこの後の南北朝の動乱を導くこととなる。後深草院は弟の龜山院に対してコンプレックスを抱いていただろうし、龜山院も兄の後深草院には対抗心を燃やしていただろう。『とはずがたり』に描かれる二人の競いは風雅に溢れてはいるが、その背景を探ると政治的な要因が複雑に絡み合っているのだ。

それでは、『とはすがたり』の本文に戻ってみよう。初度の小弓の競いで負けた後深草院側の宴から始まる。後深草院は、宴の趣向をあれやこれやと考えるが、その中でこのような提案が出る。

「正月の儀式にて、台盤所に並べ据ゑられたらむも、余りに珍しからずやはべらむ。また一人づつ占相人などに会ふ人のやうにて出でむも、ことやうにあるべし」など公卿たち面々に申さるるに、御所、「竜頭鵲首の舟を造りて、水瓶を持たせて、春待つ宿の返しにてや」と御気色あるを、「舟、いしいしわづらはし」とて、それも定まらず。

(三二四・三二五頁) (注1)

傍線部には、諸注、先行研究で指摘があるように(注2)、『源氏物語』胡蝶巻の宴が指摘されている。

中宮、このころ里におはします。かの「春まつ苑は」とはげましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し、大臣の君も、いかでこの花のをり御覽せさせむ、と思しのたまへど、ついでなくて怪らかに這ひ渡り花をもて遊びたまふべきならねば、若き女房たちの、ものめでしめべきを舟にのせたまひて、南の池の、こなたにとほし通はしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山の崎より漕ぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人々集めさせたまふ。

竜頭鵲首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心

地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などと思ふ。

(3) 胡蝶 一六五・一六六頁 (注3)

胡蝶巻では、秋好中宮への挑みへの返しとして、春の町に住む紫の上主催で春の宴が開かれる。唐風に装い竜頭鵲首の舟を浮かべ、まるで知らない国に來たようだとされる。このような豪華な宴を再現しようと、『とはすがたり』では、後深草院がこの話題を持ち出すのだ。この提案は舟が問題となり却下され実現はしなかったが、後深草院の『源氏物語』への造詣の深さが伺える一場面である。清水好子氏も、「彼は、二条によって、その振舞いに何かといえ、光源氏の面影を付されていたが、彼自身も、『とはすがたり』によれば、源氏物語の信奉者であるらしい」とし、後深草院の『源氏物語』好きを提唱している(注4)。

舟の問題で胡蝶巻の模倣を断念せざるを得なかった後深草院側は、最初の負けわざでは、女房たちに童装束をさせて、蹴鞠をさせる。そののちの勝負では、亀山院が負けたため、亀山院の女房たちが五節の舞姫のまねごとをする。三度目の勝負ではまた後深草院が負けたため、趣向を凝らした宴を行うのだが、その宴こそ、『源氏物語』若菜下巻で催された女樂を模したものであった。

若菜の巻にやしるし文のままに定め置かれて、時なりて、主の院は六条院に代り、新院は大將に代り、殿の中納言中將・洞院の三位中將にや、(略)

(三二〇頁)

この宴では、後深草院が主催として源氏の役を、亀山院を夕霧

の役としてゐる（注5）。

またこの御所御負、伏見殿にてあるべしとて、六条院の女樂をまねばる。

紫の上には東の御方、女三の宮の琴の代りに、箏の琴を隆親の女の今参りに弾かせむに、隆親、ことさら所望ありと聞くより、などやらむ、むつかしくて、参りたくもなきに、「御鞠の折に、ことさら御言葉かかりなどして、御覧じ知りたるに」とて、「明石の上にて、琵琶に参るべし」とてあり。

琵琶は、七つの年より雅光の中納言に、初めて楽二つ、三つ習ひてはべりしを、いたく心にも入らでありしを、九つの年よりまたしばし御所に教へさせおはしまして、三曲まではなかりしかども、蘇合・万秋楽などはみな弾きて、御賀の折、白河殿荒序とかやいひしことにも、「十にて、御琵琶を頼りて、いたいけて弾きたり」とて、花梨木の直甲の琵琶の紫檀の転手したるを、赤地の錦の袋に入れて、後嵯峨の院より賜はりなどして、折々は弾きしかども、いたく心にも入らでありしを、「弾け」とてあるもむつかしく、などやらむ、ものくさながら出で立ちて、「柳の衣に紅の桂、萌黄の表着、裏山吹の小桂を着るべし」とてあるが、なぞしも、かならず人よりこゝに落ちばなる明石になることは、東の御方の和琴とて、日ごろしつけたることならねども、ただこのほどの御習ひなり。琴の琴の代りの今参りの琴ばかりぞ、しつけたることならむ。女御の君は花山院太政大臣の女、西の御方なれば、紫の上に並びたまへり。これは対座に敷かれたる畳の右の上臈に据ゑらるべし。「御鞠の折に違ふべからず」とて、あれば、

などやらむ、さるべしとおぼえず。今参りは女三の宮とて、一定上にこそあらめと思ひながら、御気色のうへはと思ひて、まづ伏見殿へは御供に参りぬ。

（二一八—三二〇頁）

紫の上には、東の御方、つまり後深草院の妃である藤原愔子（のちの伏見天皇の母）があてられ、女三の宮には、新参の女房であり隆親の娘である藤原識子があてられた。明石の女御には、花山院太政大臣の女、西の御方があてられた（引用傍線部参照）。今参りの識子は、二条からみれば、母方の叔母にあたる（隆親は母方の祖父である）。この識子が女三の宮の位置に据えられたのは、隆親のことさらの所望があつたからであり、それに対して二条は不満を募らせている。しかし、前回の蹴鞠の宴で二条は龜山院から格別の言葉をかけられている。それも、二条は此度の宴にも出席せねばならなかつた。二条は明石の君の位置に据えられ琵琶の役目を与えられる。

西沢正史氏は、「ところで、『とはずがたり』の巻二には、『源氏物語』の六条院の女樂を疑似させた宮廷遊戯として、後深草院宮廷における女樂が描かれているが、それは、二条の『源氏物語』の女性たちへの見方を象徴的に物語っているものである」とし、作者二条が『源氏物語』の女君に素材的な類似性を越えた何を見いだそうとしたのか、と疑問を提示している。そして、二条の紫の上や女三の宮への意識を明らかにしている。二条は、正妻の立場への強い羨望・憧憬をもち、また、久我の皇族に連なる血統という矜持の元、紫の上・女三の宮という人物に固執しているといふのだ（注6）。

確かに、二条はこれまでも紫の上、女三の宮と重なって語られることが多かったが、ここで重ねられているのは明石の君である。この明石の君と重ねられる、という点にもう少し注目すべきではないだろうか。

本稿では、二条の明石の君への意識について明らかにしていきたい。

## 二、二条と明石の君―「数ならぬ身」がつなぐもの

ここまでで確認したように、この宴で二条は明石の君の役割を与えられる。

二条はもとから琵琶を嗜んでおり、故後嵯峨院から琵琶を賜っている。また、琵琶は後深草院の手ずから習ったものであり、二条にとっては誇れるものの一つであつただろう。二条としても、琵琶を所望されること自体に不満などはないだろう。しかし、この宴で必要とされているのは明石の君として琵琶を弾くことである。宴に出席するにあたり、その衣装は指定されており、それは、「柳の衣に紅の桂、萌黄の表着、裏山吹の小桂」（前頁、二重傍線部）であつた。これは、『源氏物語』若菜下巻の女楽で明石の君が着用していた衣の色に似せたものである。

かかる御あたりに、明石は氣おさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなど気色はみ恥つかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小桂着て、羅の裳のはかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心に

くく侮らはしからず。高麗の青地の錦の端さしたる褥に、まほにもあで、琵琶をうち置きて、ただけしきばかり弾きかけて、たをやかにつかひなしたる撥のもてなし、音を聞くよりも、またありがたくなつかしくて、五月まつ花橘、花も実も具して押し折れるかをりおぼゆ。

### ④若菜下 一九三頁

もちろん、六条院の女楽を模した宴であるため、配役は決まつており、明石の君に似せる必要がある。琵琶を弾けるという条件を鑑みると、明石の君の配役が二条なのは至極真つ当な選択なのだが、二条は「かならず人よりことに落ちばなる明石になることは」と、他の女性よりも格段身分の落ちる明石の君の配役に納得がいかないのである。西沢氏は、「現代風に考えれば、女性の幸福という点において、“悲劇の人” 女三の宮よりも、“幸い人” 明石の君の方がよさそうにも思えるのであるが、二条は、女性たちの人生の結末などよりも、源氏の名門である久我家出身であるという家門意識による高いプライドにおいて、皇族の女三の宮のほうがより重要な女性であるという認識をもっていたのである」とし、家門意識の強さが読み取れるとしている（注7）。

また、他の配役はどうなっているのか見ていくと、明石の女御は西の御方で、東の御方と並ぶ家柄のものが選ばれている。東の御方・西の御方の対座に二条と識子が座ることになるのだが、二条はもちろん女三の宮の役に選ばれた識子のほうが上座に座るものだろうと考えていた。しかし、後深草院の意向に従い、二条の方が上座に座ることとなった。

当日の酒宴も若菜巻に従つて座を設えたが、そこに今参り・識

子の父である隆親がやってくる。そして女房の座をみて憤慨する。

「このやう悪し。まねばるる女三の宮、文台の御前なり。今まねぶ人の、これは叔母なり。あれは姪なり。上に居るべき人なり。隆親、故大納言には上首なりき。何事も下に居るべきぞ。居直れ、居直れ」と声高に言ひければ、善勝寺・西園寺参りて、「これは別勅にてさぶらふものを」と言へども、「何とてあれ、さるべきことかは」と言はるるうへは、一旦こそあれ、さのみ言ふ人もなければ、御所はあなたに渡らせたまふに、誰か告げまゐらせむも詮なければ、座を下へ降ろされぬ。

(三二〇・三二一頁)

二条と今参りの娘の座が逆であろうと、隆親は憤慨するのである。二条は隆親にとって母方の祖父であり、今参りの識子は、隆親の娘である。つまり二条と識子は叔母・姪の関係なのだ。隆親はその関係をもちだし、また自分と二条の父・雅忠の位をとってみても自分の方が上であることを主張する。騒ぎをききつけた善勝寺の大納言・隆顕と西園寺実兼は、これは別途院から勅命があつたからだと論すが、隆親は聞き入れず、二条は座を降ろされる事となってしまう。二条はこのこと辛く悔しく思い、座を立ち御所から出て行つた。

おおまかに女楽の概要を追ってきたが、ここでもう一步引用の問題に踏み込んでみたい。

まず、女三の宮に擬された今参りの女房識子である。今参りの女房という新参者の女房になぜ女三の宮という位の高い役が配さ

れたのだろうか。

それはもちろん、「隆親、ことさら所望あり」という語りからみてもわかるように、親である四条隆親の特別の要請によつてであつた。隆親はこの娘に、女三の宮になること、つまり源氏に擬せられる後深草院の寵愛を受ける女性になることを所望したのではないだろうか。さらに、後深草院を源氏と考えれば、今参りの女房は、御所に新たに加わる女性であり、六条院に降嫁する女三の宮に条件的にも擬せられてもおかしくはない。それに、女三の宮を選び取ることで、まだ演奏に不慣れだということを表明し謙遜の意にもなつていよう。

つまり、今参りを女三の宮に仕立て上げようとする隆親の意図がここでは見え隠れするのだ。隆親の思惑としては、女三の宮に擬せられた娘の席次も東の御方・西の御方に次ぐ席次であると当然思つたのだろう。

しかし、期待をかけた娘の上座には孫の二条がすでに座している。それも孫は明石の君に擬せられ、明石の君は女三の宮と比べても身分が低い女性である。隆親としては、そのようなあきらかに身分の低い女性の下座に、期待をかける娘が座していることが気に入らなかつたのだろう。

第二に、明石の君に擬せられた二条である。二条はことさらに明石の君の配役について不満を抱いてきた。

先ほど確認してわかるように、二条は「なぜしも、かならず人よりことに落ちばなる明石になることは」と、その身分の低さに注目し、不満を漏らしている。

だが、明石の君は身分という点において人よりも劣るが、『源氏物語』本文に注目して見ると、その評価はそれほど悪いものでは

ない。

源氏の視点を通して語られる女樂の明石の君は、「かかる御あたり」に、明石は気おさるべきを、いとさしもあらず、もてなしなど気色ばみ恥づかし、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ」と語られる（前々頁 波線部参照）。女樂のような場では、他の女性に気圧されて当然の女性だが、決してそのようなではない、と高貴な身分の女性たちの中でも、劣らないと語られるのである。『源氏物語』に造詣の深い二条のことで、この明石の君への評価は知っている可能性が高い。だが、二条は頑なに明石の君への肯定は行わない。それはなぜなのだろうか。

一つ考えられるのは、明石の君は明石の女御という政治的に重要な姫君を生んでおり、源氏もその生母として待遇しているということである。明石の君は身分として劣るが、源氏の政治基盤の安定にひと役かっているのだ。もちろん明石の君元来の素質や性格、教養もあるが、源氏の支えとなる子をもうけることが、『源氏物語』における明石の君の保証となっていると考えられる。しかし、二条は後深草院にとって政治的に利用できる子をもうけていない。先に後深草院の皇子を出産してはいるが、夭折しており、現在は子どもがいらない状態である。しかも、明石の君には身分さえ低い、明石の入道の経済的なバックアップもあるが、二条はすでに母を亡くし、父も亡くし後見のいない状態である。

このように、子どもをもうけていない、経済的なバックアップもない自分が明石の君に擬せられるというのは、比較すればするほどその境遇の差があきらかになり、後深草院の子をもたず後見もない自身は、明石の君といっても身分が低いという要素のみ残

った明石の君しかみえないのである。二条自身が自分の出自に誇りをもっていることは再三指摘した通りであるし、明石の君とはそもそも出自の差があると考えていたのだろう。しかし、ここで明石の君に擬せられることで、身分は低い、源氏の子を産み源氏の出世の支えとなった明石の君とは似ても似つかない自身が自照され、ことさら身分に執着し明石の君を厭うのではないだろうか。

また、明石の君に擬せられた二条は宴の当日から、今参りの女房に注目している。

今参りは当日に紋の車にて、侍具などして参りたるを見るにも、わが身の昔思ひ出でられてあはれなるに、新院御幸なりぬ。

（三二〇頁）

家紋の入った網代車に乗って御所にやってくる識子は、二条にとつて昔、父が存命の頃の華やかな様子が思い起こされるのだろう、感慨深げにその様子をみている。父が亡くなった後は、母方の祖父である隆親がその後見代わりをしてきたが、此度、自分自身の娘が後深草院の御所の女房となることで、その支援は二条よりも娘の識子にうつるだろうことは目に見えている。女三の宮として女樂の場でお披露目となる識子にかける祖父の期待も二条は感じ取っていたのだろう。二条自身も、その席次を決めるときに、今参りの方が女三の宮で身分の高い配役であるので、自分より上座に座ることが当然だろうと考えていたのだ。

しかし、後深草院からの意向があるのなら、と自分が上座に座



ることを受け入れている。二条としては、明石の君の配役は不満ではあるが、血縁の女性が女三の宮として御所にあがるため、明石の君にならざるを得ず、そんな惨めな自分を後深草院が理解をして席次だけは女三の宮より上にくれたのだろう、と期待を抱いたに違いない。子はなくとも後深草院の寵愛の深い自分を明石の君として受け入れようとも考えたかもしれない。

そんな期待も空しく、二条は祖父の心ない言葉により、傷つき御所を退出してしまうのだ。二条としては、後見代わりをしてくれていた祖父の隆親が席次の入れ替えを申し出ることは予測済みだったかもしれない。確かに『源氏物語』の女樂によつて考えれば、出自の劣る明石の君が女三の宮の上座に座すことはないからである。しかし、祖父・隆親は『源氏物語』の席次を理由とせず、二条自身の識子との関係、果ては祖父隆親の官位と二条の父の官位を比べ、二条がさも劣っているように衆目に曝したのである。頼りの後深草院はまだ龜山院と別の場所で行宴を行っており、為す術もなく二条は中座し、御所を退出するよりほかに憤りを晴らすすべがなかった。

出だし車のこと今さら思ひ出だされて、いと悲し。姪・叔母には、なじかよるべき。あやしの者の腹に宿る人も多かり。それも、叔母は、祖母はとて、捧げおくべきか。こは何事ぞ。すべてすさまじかりつることなり。これほど面目なからむことに交じろひて詮なしと思ひて、この座を立つ。

(三二二頁)

参らせおく消息に、白き薄様に琵琶の一の緒を二つに切りて

包みて、

数ならぬ憂き身を知れば四つの緒もこの世のほかに思ひ切りつつ

と書き置きて、「御尋ねあらば、都へ出ではべりぬと申せ」と申し置きて、出ではべりぬ。

(三二二頁)

二条は御所を退出する際に、琵琶の緒を切り、後深草院への消息を記す。そこに詠まれた歌には「数ならぬ憂き身」と詠まれている。

二条は、自分自身が「数ならぬ憂き身」であることが此度の一件でわかったので、今生では琵琶の道をあきらめるという内容の歌を詠んだのだが、『とはずがたり』中「数ならぬ(ず)」の語の用例を調べると九例あり、当該箇所以前の用例は二例である。

『とはずがたり』の「数ならぬ身」を検討した論考として、加賀元子氏の論考がある(注8)のでそれも参考にしつつ用例を検討していく。

まずは、当該箇所以前の用例について検討していく。

一つ目は二条が年始め、粥杖事件の罪状について述べるところである。

「これ、身として思ひよらずさぶらふ。十五日に、余りに御所強く打たせおはしましさぶらふのむならず、公卿・殿上人を召し集めて打たせられさぶらひしこと、本意なく思ひまゐらせさぶらひしかども、身数ならずさぶらへば、思ひよる方なくさぶらひしを、東の御方、『この恨み思ひ返しあらせむ。』

同心せよ』とさぶらひしかば、『さ、うけたまはりさぶらひぬ』と申して、打ちまゐらせてさぶらひし時に、我一人罪に當るべきにさぶらはず』と申せども：(略)

(二八七・二八八頁)

ここでは二条は、自分は数ならぬ身であるため所在なくしていた

ところに、東の御方からの提案があつて、報復という手段に出たのだ、と弁明している。二条は「身数ならず」と謙遜している。

加賀氏は、「久我家の女という格式ある家に生をうけた自負に立つた、謙遜の表現と受け止められる」としている。また、東の御方の立場と自分の立場の歴然とした差、そして自分だけが詮議に取り沙汰されることにおける後宮での二条自身の立場を色濃く映じたものだ指摘している(注9)。

二つ目は、さがにの女とよばれる傾城の歌にみられる。後深草院に所望され連れてこられた女性だが、ちようどその時、後深草院が強く思う他の女性がやってきたせいで、雨の中牛車の中で一晩待つて明かした女性である。牛車はひどくぼろぼろな様子で、中にいる女性も濡れており、後深草院と対面することなく帰つて行つてしまう。後に後深草院は手紙を遣わすが、返事はなく、「浅茅が末にまどふさがに」と書かれた硯の蓋に、「君にぞまどふ」と書かれた薄様、自身の髪の毛、そして以下の歌が記されたものが包まれておかれていた。

数ならぬ身の世語りを思ふにもなほ悔しきは夢の通ひ路  
かくばかりにて、ことなることなし。

さがにの女は自分を卑下して、後深草院にとっては数にも入らない身と詠んでいる。

この二例をみると、二条が自身を「数ならぬ」と考えているのは、一例であり、それも恋愛における卑下ではなく、自分が処分から逃れるための弁明に使われている。

当該箇所に戻つて考えると、二条ははじめてこの後深草院への消息で、自分を恋愛関係における「数ならぬ憂き身」と称している。

加賀氏は、当該箇所において二条が「数ならぬ憂き身」を使用したのは、「この女樂事件が二条にとつて、父不在がもたらす後深草院宮廷での不安定な立場をますます実感させたに違いない。それゆえに、後深草院に対してあてた和歌に、「数ならぬ憂き身を知れば」と歌つたと考えられる」からだとしている(注10)。

もちろん、この女樂事件で、二条はその立場の危うさを自覚したのだと思う。だからこそ、「数ならぬ憂き身を知れば」と「知る」という語を伴つて詠まれ出されるのだろう。

だが、別の視点から考えるとまた違う意味も出てくるように思われる。

『源氏物語』における「数ならぬ(ず)」「(身)を伴う」の用例を検討してみよう。

『源氏物語』中この用例は、二十六例確認できる。すべて謙遜の意味で使われるが、使用者を調べてみると、明石の君が五例、柏木が三例、浮舟の母の中將の君が三例、中の君が二例、その他は各一例ずつ確認できる。この用例で目を見張るのが、明石の君の謙遜表現で使われる点である。この五例を軽く確認していき



「数ならぬみ島がくれに鳴く鶴を今日もいかにとどふ人ぞなき

よろづに思うたまへむすばほるるありさまを、かくたまさかの御慰めにかけはべる命のほどもはなくなむ。げにうしろやすく思うたまへおくわざがな。」と、まめやかに聞こえた。

② 濔標 二九六頁

濔標卷での、明石の君の歌である。源氏が帰京し、明石の君は姫君を生んでいた。その五十日の祝いを源氏を送ったところ、その返事として書かれた歌である。

いとはしたなければ、立ちまじり、数ならぬ身のいささかのことせむに、神も見入れ数まへたまふべきにもあらず、帰らむにも中空なり、今日は難波に舟さしとめて、祓をだにせむ、とて漕ぎ渡りぬ。

② 濔標 三〇四・三〇五頁

二例目は同じく濔標卷、源氏が住吉参詣を行う場面である。源氏の住吉参詣に偶然居合わせた明石の君は、京に帰り復権した源氏の様子を目の当たりにし、自分の境遇と引き比べ嘆く。自分のようなものが、このような盛儀に立ち交じって神に捧げ物をしてもとよりあつてはくれないだろう、と源氏に会うことなくその場を立ち去っていく。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りぬべきことをばのたまへど、女はなほわが身のほどを思ひ知るに、こよなくやむごとなき際の人々だに、なかなか、さてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてかきし出でまじらはむ、この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれぬ。

② 松風 三九七・三九八頁

三例目は、松風卷。明石に住む明石の君のもとに源氏からの便りは絶えずあり、上京するように勧められる。しかし、自分のようなものが上京し源氏の側に仕えても、数のうちに入らず娘の顔汚しになってしまうと状況を躊躇するのだった。

御方もいみじく泣きて、「人にすぐれむ行く先のこともおぼえずや。数ならぬ身には、何ごともけざやにかひあるべきにもあらぬものから、あはれるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ、さて絶え籠りたまひなば、世の中も定めなきに、やがて消えたまひなば、かひなくなむ」とて、夜もすがらあはれることどもを言ひつつ明かしたまふ。

④ 若菜上 一二〇頁

四例目は、若菜上卷、明石の入道が最後の消息を明石の君と妻・明石の尼君に送った後の場面である。明石の入道は、明石の君の誕生の予知夢のことなど今迄明かさなかった情報を明石の君に

与え、山中に消えて行つてしまふ。突然の父との別れに、明石の君と明石の尼君は涙にむせぶのだ。

「のたまはせねど、いとありがたき御気色を見たてまつるまに、明け暮れの言ぐさに聞こえはべる。めざましきものになど思しゆるさざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへのたまはすれば、かへりてはまばゆくさへなむ。数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳もいと苦しくつつましく思うたまへらるるを、罪なきさまに、もて隠されたてまつりつつのみこそ」と聞こえたまへば、

#### （④若菜上 一三一頁）

最後の五例目は若菜上巻で、明石の君が源氏に、明石の入道のことを語る一連の場面の中に確認できる。明石の君は、父・明石の入道の見たり知夢などについて源氏に語り、源氏も数奇な運命に思いをはせるのだった。その中で、源氏は明石の君に、今、明石の姫君が女御になり、明石の君がそこに仕えていられるのは、紫の上の力がなくてはならなかったことを語る。明石の君と紫の上は、ある種ライバルのように互いに意識してきたが、明石の姫君の養育という点で意気投合し、今では親しくしているようで、明石の君も紫の上のすばらしさを認め称揚している。そこで、紫の上と比べたら自分のようなものは数にも入らない身の上だ、と謙遜するのである。

以上五例を見てきたが、明石の君は娘を出産した後よりこの「数ならぬ身」という謙遜表現を使用していることが分かる。

明石の君と「数ならぬ身」という言葉は、明石の君の性格を特徴付ける点で切つても切り離せない言葉なのである。

そこで『とはずがたり』の本文に戻つて考えてみよう。先ほど確認したように、二条は女樂で明石の君の役割を与えられていた。他の女君より一段格の劣る明石の君に擬せられることに二条が不満を募らせていたことは明らかだ。そして、席次の問題で二条はその不満をも爆発させてしまったのだ。後深草院に書き残した和歌には、もちろん、この宴での一連の恨みごとにも含まれていただろうが、それに加えて後深草院への配役への不満も重ねられていると考えられはしまいか。

つまり、二条は一連の女樂において、自身が明石の君に擬せられたこと、母方の祖父に貶されたことによつて、自身が「数ならぬ憂き身」であることを理解し、後深草院も自分を明石の君に配役したのでから、私のことを数ならぬ女だと考えているのでしょう、と問いかけているのではないだろうか。「数ならぬ身」という語には、明石の君への意識も含まれているのだ。

後深草院も『源氏物語』に精通する一人である。明石の君が他の女君より一段劣ることは分かっていただろう。しかし、二条は琵琶を弾くことができ、明石の君の配役にはびつたりの存在であった。また、他の方々との現在の身分の差などを考えても、二条を明石の君にせざるを得なかったのだ。そのため、席次だけでも今参りの上にしてやろう、という後深草院の配慮が垣間見える。

二条を幼い頃から見守つてきた後深草院のことであるから、二条の上臈女房としてのプライドや意識を少なからず理解していただろう、だからこそその配慮だったのだ。だがこの配慮も、かえつて二条を追い詰める結果となつてしまった。後深草院がその場にい

たら仲裁役となつてくれたらうに、という気持ちで二条の「一旦こそあれ、さのみ言ふ人もなければ、御所はあなたに渡りせたまふに、誰か告げまゐらせむも詮なければ」という語りには集約されているだらう。

その後、二条は御所を飛び出し、当分の間御所に帰ることはなかった。明石の君のいない女楽の宴は中止になり、二条が飛び出した理由を東の御方から聞いた後深草院は、「ことわりや、あが子が立ちけること、そのいはれあり」と、二条が座を立つたことはもつともだ、と二条を擁護する。伯父のあまりの態度にほかの人々も隆親を非難する状況となつた。

### 三、まとめにかえて

以上、女楽を模した宴に際しての、二条の『源氏物語』の女君への意識を探ってきた。二条の紫の上、女三の宮への意識はすでに多く指摘され、二条の家意識・正妻的位置への憧憬が読み取れる。しかし本章では、あえて二条から厭われる明石の君への意識について探ってきた。

琵琶を演奏できる二条は、後深草院の配役で明石の君と決まつたが、明石の君の出自の低さから不満をつのらせる。二条と明石の君への嫌悪は、ある意味で同族嫌悪的でもあるし、自分より身分の低い明石の君は、源氏の子を設け榮達していくのに、自分は何れもできず燻っていることに對する歪んだ羨望のまなざしがあったのかもしれない。

二条は明石の君として琵琶を演奏することを受け入れ準備もするが、宴当日、伯父の心ない非難によってその決意さえもないが

しろにされる。彼女の矜持は音を立てて崩れ、悲しみの中御所を後にするのだつた。後深草院への置き手紙には、自身のことを「数ならぬ憂き身」と称し、今回の配役を決めた後深草院にも不満をぶつける内容も含まれていると解釈する。

あれほど二条の中で卑下していた明石の君を象徴するような言葉、「数ならぬ身」を自身で使うことは、自分の身の頼りなさを自覚し、そして久我の家のプライドを打ち砕かれた証拠なのだらう。加えて二条は、あれほど自信に思っていた琵琶を生涯弾かないことを誓う。これには、明石の君の影を負うことへの拒絶反応が見えると考ええる。明石の君と二条をつなぐ最大の事柄は、琵琶を弾くという才能である。この才能を切り離してしまえば、二条は明石の君とは重ならなくなる。二条は、自分で「数ならぬ身」である明石の君と近い立場におかれたことを自覚しながらも、その反対で「数ならぬ身」ではない紫の上、女三の宮（注11）への憧憬を捨てきれず、その葛藤が琵琶の緒を切ることにあらわれていると考える。

ではその後の「数ならぬ身」の用例についても軽くみていこう。『とはすがたり』中四例目は、巻三の有明の死後の、後深草院と二条の贈答歌に確認できる。

後深草院

の月

憂きは世のならひながら、ことさらなる御心ざしも、深かり  
つる御嘆きも、惜しけれ」などありしも、なかなか何と申す  
べき言の葉もなければ、

二条 数ならぬ身の憂きことも面影も一方にやは有明の月

とばかり申しはべりしやらむ。

(三九一頁)

二条は自身を「数ならぬ身」と詠んでいるが、これには先に確認した自分の身意識の自覚が含まれているだろう。父母に先立たれ宮中では後見をもたず、また有明の月との関係においては、唯一の頼りである後深草院への裏切りという心情も重なるのだろう。次に「数ならぬ身」の用例が確認できるのは、二条出家後の巻五での描写である。

宮々わたらせおはしまししかども、みな先立ちまゐらせおはしまして、ただ御一所わたらせおはしまししかば、かたみの御心ざし、さこそと思ひやりまゐらすものしく見えさせおはしましこそ、数ならぬ身の思ひにも、比べられさせおはします心地しはべりしか。

今はの御幸を見まゐらすにも、昔ながらの身ならましかば、いかばかりかなど、おぼえさせおはしまして、

二条 さてもかく数ならぬ身は長らへて今はと見つる夢ぞ悲しき

(五〇〇・五〇一頁)

悲しきことのみ色添ひて、「秋しもなどか」と、公私おぼえさせたまへて、数ならぬ身なりとも、さしも思ひはべりしことのかなはで、今まで憂き世に留まりて、七つの七日にも遭ひまゐらす、我ながらいとつれなくて、三井寺の常住院の不動は、智興内供が限りの病には、証空阿闍梨といひけるが、「受

法恩重し。数ならぬ身なりとも」と言ひつつ、晴明に祭り変へられければ、明王、命に代りて、「汝は師に代る。我は行者に代らむ」とて、智興も病やみ、証空も命延びけるに、君の御恩、受法の恩よりも深かりき。申し請けし心ざし、などしも空しかりけむ。「苦の衆生に代らむために、御名を八幡大菩薩と号す」とこそ申し伝へたれ。数ならぬ身にはよるべからず。御心ざしのなほざりなるにもあらざりに、まことの定業はいかなることもかなはぬ御事なりけりなど思ひつづけて、歸りてはべりしかども、つゆまじろまれざりしかば、

(五一〇・五一頁)

残りの五例は、ほぼまとまつて巻五にて確認できる。それらは、東二条院崩御から後深草院の四十九日の一連の記事から確認できる。加賀氏は、「巻五の「数ならぬ身」の用例を見ていくと、東二条院・後深草院の崩御という、出家した後の二条が宮廷の中心部と深く関わってくる場合において使われる」とし、「これは、宮廷とは遠く隔たつて存在している自分を意識にしている語と見てよいであろう」と結論付けている(注12)。筆者もその意見に賛同するところである。

とにかく、この女樂は二条にとつて自分の身意識を再認識させる大きな事件となつたことは明らかである。

注

(1)『とはすがたり』の本文引用は、宮内庁書陵部蔵本を底本とし

た、

久保田淳 校注・訳『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはすがたり』(小学館・一九九九)

を使用した。

(2) 主な先行研究では、

福田秀一「中世文学における源氏物語の影響Ⅰ『とはすがたり』について」『中世文学論考』(明治書院・一九七五) 所収)

清水好子「古典としての源氏物語——とはすがたり執筆の意味——」

『源氏物語及び以後の物語研究と資料——古代文学論叢第七輯』

一九七九・紫式部学会)

西沢正史「『とはすがたり』における『源氏物語』」『女流日記文学講座第五巻 とはすがたり・中世女流日記文学の世界・勉

誠社・一九九〇)

が挙げられる。

(3) 『源氏物語』の本文引用は、

阿部秋生ら校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語』①—

⑥(小学館・一九九六—一九九八)

を使用した。

(4) 清水好子「古典としての源氏物語——とはすがたり執筆の意味——」

『源氏物語及び以後の物語研究と資料——古代文学論叢第七輯』

一九七九・紫式部学会)

(5) 補足として、後深草院が六条院の主、源氏に擬せられ、龜山院

がその子夕霧に擬せられた意味について書いておく。宴において、負けわざのため主賓たる龜山院が源氏に擬せられてもおか

しくはないはずである。しかし、ここでは後深草院が源氏としてこの宴に君臨しているのだ。源氏たる後深草院は、女君たち

の所有者であり、また、夕霧の上位に立つものとして位置づけられていると考えたい。

(6) 西沢正史「『とはすがたり』における『源氏物語』」『女流日記文学講座第五巻 とはすがたり・中世女流日記文学の世界・勉

誠社・一九九〇)

(7) 注6に同じ。

(8) 加賀元子「『とはすがたり』「数ならぬ身」考」(『とはすがたり』の諸問題)(和泉書院・一九九六)。

(9) 注8に同じ。

(10) 注9に同じ。

(11) 『源氏物語』中二十六例確認できる用例の内、紫の上に使われる例は、一例のみ。女三の宮に至っては用例は確認できなかった。紫の上の用例は、若菜上巻で女三の宮と対面する場面に確

認されるのみである。

(12) 注8に同じ。

(12)

(あらい・ゆみこ／東京学芸大学大学院修士課程)